R４地域協働研究（ステージⅠ）

R04-Ⅰ-24「地域課題解決に高校生等が参画することによるシビックプライドの醸成と教育的効果」

課題提案者　盛岡市
研究代表者　高等教育推進センター　渡部 芳栄
研究チーム員　天野 哲彦・高瀬 和実（以上、高等教育推進センター）、
中嶋 孝樹・吉田 央・阿部 牧子・佐藤 俊治・小嶋 康之（以上、盛岡市）

〈要旨〉

本研究では、盛岡市が行ってきた「盛岡まるごと学びの場プロジェクト」の取組と、取組の成果について分析し、地域や行政が関与する地域課題解決型学習の高校生・大学生のシビックプライド育成への影響と今後の課題を考察した。シビックプライドの育成については必ずしも望ましい結果とは限らなかったが、探求学習等に対する関心については望ましい結果も見えた。今後は自発的なテーマ設定、授業全体の見通し、適切な進捗管理、アウトプットの実施、地域の方々との調整などの機能が求められる。

1　研究の概要（背景・目的等）

盛岡市では地域を知る機会を提供するため、総合的な探究の時間へのプログラム提供を行う「盛岡まるごと学びの場プロジェクト（以下、学びプロ）」を実施してきた。令和３年度においては、市内の４つの高校をモデル校に指定し、地方創生などの観点から盛岡市の地域課題に対する取組状況の説明や外部講師による出前講座、生徒のフィールドワーク先の調整などを行ってきた。

こうした中において、卒業後も関わりを持つことを希望する生徒も出始めている一方で、授業、受験対策、部活動など、既存の活動があり、地域との関わりの時間を確保しにくいという問題点が明らかになってきた。学びプロ等を効果的・継続的に活用していくためには学校や生徒・保護者の理解が必要となるが、その必要性について広く理解されるに至っておらず、高校生や大学生等が活用する機会が限定的となっている。そこで本研究では、学びプロ等の取組とその活用による、高校生・大学生のシビックプライド育成への影響と今後の課題を考察することを目指した。

2　研究の内容（方法・経過等）

令和４年度に実施した学びプロ参加校のうち３高校（A高校・B高校・C高校）と、大学で行政と協働して地域課題解決型授業を実践した盛岡大学（以下、盛岡大）に対して学びプロ実施前と実施後の２回のアンケートを実施し、分析を行った。

3　これまで得られた研究の成果

１）テーマについて

図１は各校で設定されたテーマに登場する単語をワードクラウドで表したもののうち、A高校の例を示している（他の学校も同様に作図している）。テーマがもっとも多く（大きく）現れている単語を見てみると、A高校と盛岡大では「盛岡」、B高校では「地域」、C高校では「人」である。また、B高校とC高校では「岩手」が大きく現れており、探求学習において扱う地域の規模感にも違いがあったようである。A高校のテーマを見ると、医療・子育て・支援・充実・高齢などの単語が大きく表示されており、これらは都市計画・政策、しかも盛岡市の政策をテーマとして取り上げたことの結果であると推測される。それに対してB高校やC高校では、海洋・ゴミ・活性・音楽（B高校）、人・関係・睡眠・心理（C高校）などといった、（無関係とも言い切れないものの）都市計画とは少し離れた、自分の関心のあるテーマが多く設定された可能性が高い。

図１　A高校の探求テーマ

２）取組の方法について

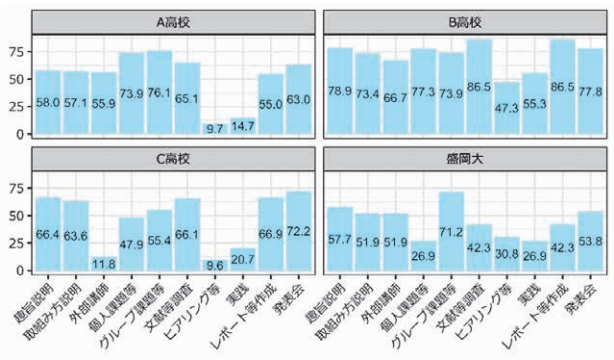

図２　内容別取組の割合

内容別に個々の取組の割合について見ると、B高校において相対的にどの取組も割合が高かった。特に「文献・web等

による調査」（図中「文献等調査」）・「外部人材等へのヒアリング・フィールドワーク」（同「ヒアリング等」）、「課題解決のための実践活動」（同「実践」）、「レポート、報告物作成」（同「レポート等作成」）などは、他校よりも群を抜いて高い割合である。A高校で特徴的なのは、「外部人材等へのヒアリング・フィールドワーク」「課題解決のための実践活動」の低さと言え、また、インプットに関わる取組（「学校による趣旨説明」（図中「趣旨説明」）・「学校による取組み方の説明」（同「取組み方説明」）・「外部講師による講話・話題提供」（同「外部講師」）などもやや低い（盛岡大も同様）。もしすべてのグループ等が同じ取組をしたとすれば、論理的には実施したか実施しなかったかの２つしかないはずであるが、この割合が低く出ているということは、その実感が薄かった高校生・大学生が多かったということであり、工夫が必要かもしれない。

３）居住希望の変化

表１　盛岡地域への今後の居住希望の変化

学校	居住希望	実施前	実施後	差
A 高校	県外や海外等	17.5	23.8	6.3
	こだわりなし	17.3	13.4	-3.9
	盛岡地域だが他所も	46.1	48.1	2.0
	盛岡地域	19.1	14.6	-4.5
B 高校	県外や海外等	26.3	31.2	4.9
	こだわりなし	13.6	22.3	8.7
	盛岡地域だが他所も	53.4	39.7	-13.7
	盛岡地域	6.8	6.8	0.0
C 高校	県外や海外等	16.0	18.6	2.6
	こだわりなし	17.1	17.8	0.7
	盛岡地域だが他所も	50.4	45.9	-4.5
	盛岡地域	16.5	17.8	1.2
盛岡大	県外や海外等	13.8	15.6	1.8
	こだわりなし	27.6	18.8	-8.8
	盛岡地域だが他所も	44.8	43.8	-1.1
	盛岡地域	13.8	21.9	8.1

表１は盛岡地域に今後住み続けたいかを尋ねた結果を、学校ごとに示したものである。A高校では「盛岡地域」や「こだわりなし」が低下し、「県外や海外等」での居住や、「盛岡地域だが他所も」の割合が上昇した。明確に盛岡地域が低下し、また、こだわりがなかった割合も県外等への居住希望となった結果と言える。B高校でも「盛岡地域だが他所も」の割合が大きく低下し、「こだわりなし」や「県外や海外等」での居住希望が大きく上昇した。C高校ではA高校・B高校ほど大きな変化には見えないが、それでも「盛岡地域だが他所も」が低下し、「県外や海外等」での居住希望がやや上昇している。盛岡大のみ異なる傾向で、「こだわりなし」が低下し、「盛岡地域」が上昇している。

4　考察と今後の課題

地域・行政と協働した課題解決型授業の実践について、その内容・方法、成果を示してきたが、分析結果の考察と今後の課題を述べる。以下、紙幅の都合で前節で触れることのできなかった内容も含んでいるが、詳細は文末「研究成果」を参照いただきたい。

まず、テーマ設定について、狭義の「盛岡」に比較的限定している学校もあれば、「岩手」と広く捉えている学校や、地域課題を必ずしも前提としない学校もあった。また、そのテーマ設定においても、自分の興味関心で決めた生徒が多い学校もあれば、そうでない学校もある。これらの在り方が、もしかすると成果に影響を与えているかもしれない。

B高校ではまんべんなく取り組んでいた一方、先生の関与はそれほど大きくなかった。一方、この授業の趣旨や取組み方の説明が十分でない可能性がある学校もあったが、全体を見通したり進捗を管理する力をつけるという意味ではやはり今後の改善が期待される。また、アウトプットの重視についても同様で、身につけた知識・技術、資質・能力を定着させるにはやりっぱなしにしないのも大事であろう。なお、地域の人たちとの協働については、必ずしも十分とは言えなかった。

結果的に生徒・学生にどのような効果があったかというと、地域協働研究の趣旨からすると必ずしも望ましい結果ばかりとは言えなかった。愛着において「好き」が比較的大きく低下している学校や、居住希望でも同様の傾向を示した学校があった。ただ、探求学習等に対する関心については望ましい結果も見えた。直接的な因果関係の分析は難しいものの、盛岡の地域課題を調べたり解決のための実践を行う中で、無批判に「好き」という気持ちが薄れたり、それゆえ、他の地域への関心が相対的に上昇したという可能性もありうる。収集データの性質の問題で、テーマ設定や取組みのあり方が成果に与える影響を厳密に検証できたわけではないが、上述のようにテーマ設定のあり方や授業の進め方・周囲との関与の多寡が影響した可能性は否定できない。

以上のことから、地域の方々との調整、全体の適切な進捗管理が行われることが求められる。特に、現状ではまだ少ない地域の人との関与は、地域課題に対する深い理解を促すためにはもっと増加させる必要があるだろう。学校教員がすべてを担うことができれば問題ないが、それほど簡単なことではない。そうした機能を誰がどのように担うかについて、今後検討していく必要があるだろう。

5　参考文献

樋田大二郎・樋田有一郎，2018，『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト―地域人材育成の教育社会学―』明石書店
小林雄一郎，2017，『Rによるやさしいテキストマイニング』オーム社

6　謝辞

本アンケートにご協力を頂いた３高校及び盛岡大学他、プロジェクトの実施にご協力いただいたすべての学校関係者に心より感謝申し上げます。

7　研究成果

渡部芳栄他，2023，「盛岡市における地域・行政と協働した課題解決型授業による高校生・大学生への効果」『リベラル・アーツ』18（編集中）。